

研究報告 「ゾルゲ事件の残された謎」

一橋大学教授 加藤哲郎

日露歴史研究センターは 2007 年 11 月 11 日(日)、東京・府中市の多磨霊園で、恒例の「ゾルゲ・尾崎墓参会」を催しました。会員・協力者約 40 人が参加、ゾルゲと尾崎の墓に 1 人ずつ線香を手向けて、63 年前に非業の死を遂げた二人の冥福を改めて祈りました。

墓参会参加者のうち有志約 30 人はこのあと、多磨霊園北口正門前の大野屋で開かれた、当センター主催のゾルゲ事件研究会に出席、現代史研究家として著名な一橋大学教授加藤哲郎氏から、最新の研究報告「ゾルゲ事件の残された謎」を聞きました。同年夏に、ドイツとスウェーデンで行なった現地調査・取材に基づい

て明かされた、この日の加藤報告の内容は出だしから、「情報戦としてのゾルゲ事件は、これまでの研究そのものが政治的であった」という衝撃的なものでした。とりわけ、そうした偏見を排して、「当時の国際関係や中国の民族解放運動などとの関係で、公平かつ客観的立場で研究を行わないと、ゾルゲ事件の本質を見誤ることになる」という指摘は、傍聴者にとって極めて新鮮な視点として受け止められました。

以下は、このときの同氏の講演内容を記録したテープを起して、その全文を収録したものです。

日露歴史研究センター事務局

はじめに

司会 皆さん、きょうは日露歴史研究センター主催のゾルゲ事件研究会に、たくさんお集まりいただきまして、ありがとうございます。本日の司会を務めます、当センター代表の白井久也です。よろしくお願ひいたします。

きょうの研究会には、講師として一橋大学教授加藤哲郎先生をお招きしました。この中には、先生と顔馴染みの方がたくさんおられますが、コミンテルンの学術的な研究者として、大変、有名な方です。

本日の講演のテーマは、「ゾルゲ事件の残された謎」という非常に興味深いものでして、この夏、先生がスウェーデンやドイツへ現地調査に行かれて収集されてきた資料をもとに報告されるそうで、「面白い話が聞けそうだ」と大いに期待しております。先生の講演は約 1 時間予定しており、その後お集まりの皆様方との質疑応答を行ないたいと思います。

それでは加藤先生、よろしくお願ひいたします。

(拍手)

加藤 私が政治学者として現代史研究をやっておりますと、ゾルゲ事件と重なる部分が出てくるので、これまでもときどき口を差し挟む機会がありました。そうしたら、「それは面白い」と白井さんから、シンポジウムとか講演会に呼び出しがかかって話を

してきました。その関係もあって、原稿を書いていたら、かなりの量になりました。そこで、つい最近、『情報戦と現代史』(花伝社、2007 年)という本を出版しました。(そう言って、現物を掲げて見せる)

この中に、ゾルゲ事件に関係する論文が、3 本ばかり収録してあります。モンゴルの首都ウランバートルで、2006 年 5 月に開かれた「第 4 回ゾルゲ事件国際シンポジウム」で行なった元ソ連内務人民委員部(NKVD)極東地方長官リュシコフ 3 等大将の日本亡命に関する報告などです。ただ本日のお話の導入部は、ゾルゲ事件とは直接関係のないことから始めます。そこから話して行くと、今まで研究されてきたゾルゲ事件とはだいぶ違ったゾルゲ事件が見えてくるので、そういう立場から、本日の報告を進めようと思います。きょうは、みなさんに資料を 2 つお配りしましたが、片方はイントロ(話の導入)でしか使いません。もうひとつは「ゾルゲ事件の残された謎」という資料です。これを中心にして、適宜説明しながら、お話をすることにしましょう。

スウェーデンに亡命した崎村茂樹の謎

私がこの 1 年ほど研究してきたのは、ゾルゲ事件そのものではありません。ほとんど皆さんが聞いたこともない日本人、崎村茂樹という人物についての研究です。この人物は、東京帝国大学農学部農業経済学科講師でしたが、太平洋戦争が始まる 1941 年

初めに、日本政府によってドイツに派遣されました。本当は半年で帰国する予定だったのですが、同年6月に独ソ戦が始まったため、日本へ帰れなくなって、ベルリンの在独日本大使館の囑託になりました。



ゾルゲ事件研究会で講演する加藤哲郎一橋大学教授
東京・小金井市の大野屋で撮影 白井久也

彼は元々経済学者だったので、鉄鋼統制会ベルリン事務所でドイツと日本の経済を真面目に分析してみると、「日独両国はどう見てもこの戦争は勝てない」という結論に達した。そこで、1943年9月に、ベルリンから、当時中立国だったスウェーデンのストックホルムに亡命してしまいました。

同地で米英連合軍に連絡をとり、「日独枢軸は間もなく敗れるだろう」という話をしたので、それが当時の米ニューヨークタイムズ紙とタイム誌、英国デイリーメール紙、ロイター電などで大きく報道されました。ただし戦時中なので、日本では頭から無視され、このことはまったく報道されませんでした。当時のニューヨークタイムズを見ると、ドイツ駐在の日本大使館員にもかかわらず、「初めて連合軍に加わろうとした日本人」「枢軸国の敗北を公言した日本人」と大々的に紹介されております。

この研究のきっかけは、戦後西独で有名な映画評論家になったユダヤ人女性カレーナ・ニーホッフの記録中に SAKIMURA という日本人名が出てくるが何者かと、ベルリン映画博物館から外務省外郭団体の日独センターに問い合わせがあつて、ドイツに詳しい私ほか数人の日本人に連絡をしてきたことから始まり、7人の探索チームで明らかにしてきたものです。

新中国で「毛沢東暗殺事件」に連座

この崎村茂樹という人物のことを調べて行くと、ひとつは1943-44年にベルリンの日本大使館からストックホルムに亡命したこと、もうひとつは1945年5月にドイツが敗れたとき、欧州にいた日本人は全員、ソ連（注 当時の日本にとって中立国）のシベリア鉄道を使って満州国経由で帰国しましたが、日本に戻ったら反逆罪だと脅されていた崎村は、本国の帰任命令に背いて、突如ベルリンで行方不明になってしまいました。これは当時の外務省の記録にも残っています。

その崎村が、1945年9月、つまり日本の敗戦のあと、中国の新京（現在の長春）に現れ、それから米国領事館に勤めていたらしいのですが、もうひとつの大きな事件に遭遇するのです。それが1950年10月1日（49年に新中国が成立した翌年）の国慶節に「毛沢東暗殺事件」に関わって7人が有罪（うち日本人山口隆一とイタリア人アントニオ・リヴァが死刑）になるのですが、崎村はこの事件に連座して、1950年に逮捕され、55年まで5年間中国に監禁されたのち、日本に帰国しました。戦時中は日独同盟の中で亡命事件を起こし、戦後は毛沢東暗殺未遂事件に関わり、禁固5年の刑を受け帰国しました。

日本に帰国後、崎村は1956年から拓殖大学経済学部教授になりました。拓大には海外事情研究所があります。その発足に併せて、戦後東大教授を公職追放された近衛側近の矢部貞治という政治学者が拓大総長となって、経済学部を強化するため元東大講師崎村茂樹を拓大に招いたのです。崎村は反共的な時事分析は嫌って、鉄鋼関係の特許を研究し、後に東京理科大に移ります。この話は本日の主題ではないので、興味のある方は紀伊国屋書店から出ている『インテリジェンス』第9号（2007年11月）に「情報戦の中の『亡命』知識人」として詳しく中間報告してありますから、そちらを参照してください。

ウィロビー中将と荒木光太郎・光子夫妻

この崎村茂樹亡命の謎を探究するために、私はこの夏に1ヵ月ほどドイツとスウェーデンに行ってきました。その資料収集の過程で、実はゾルゲ事件に関係する新しい問題に、いくつかぶつかりました。そのことについて、お話をしようと思います。

崎村茂樹は、東大農学部の助手から講師になって、1941年にドイツへ渡るのですが、その際のパトロンが、彼を助手にした東大経済学部教授荒木光太郎という人物です。その奥さんが荒木光子とあって、戦前の三菱財閥の娘で、日本の社交界の花と呼ばれた女性でした。荒木光子は、戦後日本を占領統治し

た連合軍総司令部（GHQ）の諜報機関 G2 の親玉であったウィロビー中将邸に自由に出入りできるただ1人の日本人でした。東大教授夫人で、三菱財閥の出身ということで、戦前から彼女は東京で外国人とつきあってきました。崎村家の記録によると、彼は荒木夫妻の通訳として、特に光子夫人にくっついて、いろんなところへ出入りをしていました。中でも、同盟国在日ドイツ大使館のパーティの常連で、しばしばオット大使夫妻やゾルゲと会っています。

この荒木夫妻のことが活字になっているのは、米国の有名な歴史学者ゴードン・プランゲの『ゾルゲ東京を狙え』（日本語版上下2巻、原書房、1985年）です。この本の冒頭に「ゾルゲ事件」に登場する主要人物という人名案内があって、「東京社交界の名花」として「東大教授荒木光太郎夫人」荒木光子が載っています。ゾルゲ事件のドイツ側の事情に一番詳しい日本人として、彼女の証言は、プランゲの本の中に何箇所も出てきます。とくにゾルゲの女性関係についての記述のほとんどは、この荒木光子へのインタビューによるものです。

言い換えれば、助手崎村茂樹の通訳・分析によって知り得た戦前のドイツ大使館情報を、戦後に荒木光子は、ウィロビーやプランゲに伝えていたのです。

読売新聞在欧特派員嬉野満洲雄の回想録

もう1つは、崎村茂樹のスウェーデン亡命事件について調べて行ったところ、当時の英語やスウェーデン語のマスコミでは、大きく報道されていました。当時は日本の新聞のベルリン特派員として、朝日新聞だったら笠信太郎、同盟通信（のちの共同通信）なら江尻進らがいきました。ところがこの人たちの記録を調べると、崎村亡命事件は当時の英米メディアに載り、ロイター電はラジオでも放送されたのですが、日本の新聞には当時も戦後も一切出てきません。なぜかと言うと、ドイツの日本大使館から亡命者を出したということは、外務省にとっては大事件であって、当時の駐独日本大使大島浩の恥部にあたるわけですから。そのことについて緘口令が布かれていて、当時の大使館員や特派員、駐在員の回想録にも、一言も出てきません。最近ようやく、当時の在独日本大使館の一番若い外交官だった吉野文六氏（注 戦後、外務省北米局長）が、崎村茂樹のことを、間接的ですが認めました。

唯一出てくるのは、読売新聞ストックホルム特派員からベルリン特派員になった嬉野満洲雄が、敗戦直後に著した回想録『勝利を懼れる』（立書房、1946年）の中で、名指しを避けて一言及しているだけです。嬉野は、その中で「ストックホルムに伯林から静養に来ていた日本の若き某助教授は、多少神経衰

弱気味であったが一、二週間中に伯林に反戦運動が起りさうだから行くのは取り止めよと頻りに引き止めてくれた。好意は感謝したがその内容は信じられぬものがあつた。この若き学徒は間もなく、ドイツの事情について語ったことがストックホルム発ロイターで報道されたため問題になり、日本側出先は『ゾルゲ事件の仇討をされる懼れがある』とて大いに狼狽、同君を伯林に呼び返して官庁の監視下においたが、ナチスの敗戦後、帰国を肯んぜず、輸送用トラックから姿を消した由である」と、書いています。崎村茂樹のことです。

実際、当時の日本大使館は、この亡命問題を揉み消そうと必死になりました。なぜ「ゾルゲ事件の報復」なのかというと、嬉野は、「ドイツ人が東京で処刑されたに対し、今度は日本人が報復的にドイツで罰せられんことを日本側出先官辺は気にしていた」と注記しています。つまりヒトラーやゲシュタポ（ドイツ国家機密警察）は、ゾルゲというドイツ人が日本の官憲の手で捕まって、日本で死刑にされそうだとすることに怒っていた。要するに黄色人種である日本人が白人であるゾルゲを捕まえ、同盟国ドイツに身柄を渡さず、自分たちで取り調べ死刑にするのはけしからんと、いきり立っていた。それで、ドイツにいる日本人は、ゲシュタポから報復があるのではないかと危惧していたのです。

事件を揉み消した駐独日本大使大島浩

そこへ、崎村という大使館関係者がストックホルムに亡命してしまったものだから、ゲシュタポは、ストックホルムまで彼を捕えに行った。この事態に「もし彼がドイツ側の手に渡ると、ゾルゲの報復措置として今度はドイツで日本人が死刑になりそうだ」と日本大使館は慌てた。そこで、大島大使は、ゲシュタポと交渉し、崎村は日本側で叛逆罪にすると行って、日本大使館員をスウェーデンに派遣し彼の東京の留守家族や友人も殺すと崎村を脅して、ようやく拘束しベルリンに連れ戻し監禁したのです。これらは、スウェーデンとドイツの公文書館文書で、大体分かりました。

この事実から明らかなことは、ゾルゲ事件は、ソ連のスパイ事件として駐日ドイツ大使館からドイツ本国の外務省に報告されたけれども、当時のナチスの高官やゲシュタポにとって、むしろ屈辱的なものと受け止められていたことです。ドイツの当時の同盟国である日本人が、こともあろうに、ゾルゲという生粋のアーリア人（注 ゾルゲの血統は、ドイツ人とロシア人の混血）を捕えて、ドイツ側に身元も引き渡さず、東京で裁判し処刑したという事件なのです。ドイツ本国では、ゾルゲ事件は、同盟国であるドイツと日本の関係に亀裂を生む迷惑な事件として扱われたということが分かりました。

そこで、何でそういうことになるのかについて、これから話を進めたいと思います。

ゾルゲ事件を「政治的」に扱う過去の研究

ゾルゲ事件の真実の解明にとっては、一見回り道のように見えますが、過去の研究文献や公開資料の再検討が必要で、眼光紙背に徹して読み直すと、ゾルゲ事件関係の文献や記録には、いろいろな問題が見えてきます。その大きな原因の1つは、みすず書房発行の『現代史資料 ゾルゲ事件1～4』にわれわれは余りにも頼り過ぎたのではないかということです。米国やソ連や日本で、ゾルゲ事件はこれまでどう取り扱われてきたのか？ つまり情報としてのゾルゲ事件の評価と利用の問題があるのです。これは私の『情報戦と現代史』で書いたことですが、ゾルゲ事件の研究そのものが、非常に「政治的」に取り扱われてきたという問題にほかなりません。

例えば、ソ連でのゾルゲの名誉回復のとき、その裏に何があったのか？ また冷戦下の米国でゾルゲの本が出版されたとき、著者のアメリカ人はどういう意図で書いたのか？ そういうことをよく考えながら読まない、いけないのです。

ゾルゲ事件が海外で知られるようになったのは、1949年にマッカーサーの幕僚でGHQの諜報機関（G2＝参謀第2部）の親玉であった、ウィロビー中将がまとめた「ウイロビー報告」（“SHANGHAI CONSPIRACY： The Sorge Spy Ring” 福田太郎訳『赤色スパイ団の全貌 ゾルゲ事件』東西南北社、1953年）が刊行され、50年代初めに米国で吹き荒れた赤狩り、つまり「マッカーシズム」に利用されたことによります。この「報告」は、上海を舞台にした米国人赤色スパイ団をデッチ上げるために作られたものです。アメリカ人女性ジャーナリスト、アグネス・スメドレーは上海でソ連のスパイをしていたというのがウイロビー報告の核心で、なぜならスメドレーの周辺にソ連スパイのドイツ人リヒアルト・ゾルゲや日本人尾崎秀実がいたという話です。

プランゲと旧日本軍の知識層の関係

このウイロビー報告を前提にして、それを忠実な形で受け継ぎ、上海から東京に主舞台を移したのが、ゴードン・プランゲの“TARGET TOKYO”（千早正隆訳『ゾルゲ東京を狙え』上下、原書房、1985年）です。この本の特徴は、プランゲがいかなる人物であったかを考えれば、良く分かることです。

プランゲは、元々米国の歴史家でメリーランド大学教授だった人で、GHQのG2（参謀第2部）がマッカーサー元帥の下で太平洋戦史を書くことになって米国から派遣され、ウイロビー指揮下のGHQ戦

史課長になりました。プランゲの下で、たくさんの日本人が雇われて、太平洋戦史に絡んだ記録を収集し、その中にゾルゲ事件も含まれていました。

ウィロビーの忠実な部下として、プランゲの下で使われた日本人の中に、先ほど言及した荒木光太郎、光子夫妻がいます。荒木光太郎が、日本側の代表・編集主任でした。荒木は戦時中の東京帝国大学経済学部の戦争協力の中心人物の1人で、敗戦で東大を追放されるのですが、ウィロビーが身柄を引き取って、利用したのです。

荒木光子夫人は、ウィロビーの愛人と言われたほどの実力者でした。吉原公一郎の『謀略の構図』（ダイヤモンド社、1977年）では、民政局（GS）のケーディス大佐と鳥尾子爵夫人の関係にあたるのが、G2ではウィロビーと荒木夫人の関係だと出てきます。

ウィロビーの戦史課は、荒木夫妻のほかに優秀な日本の元軍人を引き取って使いました。有末精三（注 元陸軍中将。旧軍関係者を集めてGHQに対ソ情報を提供した）、服部卓四郎（注 元陸軍大佐。著書に『大東亜戦争全史』がある）、河辺虎四郎（注 元陸軍中将、終戦時参謀次長）らです。彼らは吉田茂内閣がGHQのポツダム政令で朝鮮戦争勃発直後に創設した警察予備隊（注 のちの自衛隊）の発足に当たって、重要な役割を果たしました。旧日本軍部の中の参謀・情報関係の才能のある人々を釣り上げて、戦犯訴追を免除し、GHQ・G2に雇い入れて、太平洋戦史研究をやらせたのです。通史はマッカーサーが気に入らず没になりましたが、その情報収集の副産物の1つがゾルゲ事件で、この研究を組織したのがウィロビーでした。その下で具体的に資料集めなどを行ったのがプランゲや荒木光太郎、有末精三らだったのです（丸山一太郎「マ元帥の『太平洋戦史』編纂の内実」『中央公論』1952年5月）。

現代史資料を利用したジョンソンの著作

プランゲは、ゾルゲ事件の本を書くために、1964-65年に再来日しますが、そのころ荒木光太郎は没していて、実際に協力したのは、光子夫人や有末以下旧日本軍人たちでした。マッカーサーならびにウィロビー系列のゾルゲ事件の扱い方は、中国スパイ事件として戦前に上海で活動した米国共産党員たちをマッカーシズムで葬ることに直接の政治的狙いがあったため、ウイロビー報告は、米本国では必ずしも高く評価されませんでした。むしろワシントンの国務省筋で重視されたのは、ウィロビーやプランゲよりもアカデミックな政治学者、チャルマーズ・ジョンソンの研究でした。

チャルマーズ・ジョンソンは、1964年7月に、

“An Instance of Treason ”（反逆の動機）（邦訳『尾崎・ゾルゲ事件』弘文堂、1966年）を著しますが、64年は、ゾルゲが11月に「ソ連邦英雄」として名誉回復を遂げた年で、その直前です。ゾルゲ事件の基本資料としては、日本では『現代史資料 ゾルゲ事件』（全4巻、みすず書房）が出ていますが、米国ではプランゲやウィロビーが集めた重要資料がスタンフォード大学フーバー研究所に渡っていて、ジョンソンは、両方の資料を使っています。ゾルゲがまだソ連で名誉回復される前に、「ウィロビー将軍の扇動的な連合最高司令部報告の誤りを正す」と明言して、公刊されたものです。初版本の日本語訳はお読みになった方も多いと思いますので、ここでは詳しくは申し上げません。

これに対してプランゲの本は、ウィロビー報告を下敷きにしたため、上海時代のゾルゲや尾崎の活動はほとんど出てきません。あたかもウィロビー報告の続編のようです。ジョンソンの本は、本当にウィロビー報告が言ったように、ゾルゲ・尾崎事件はスメドレーを中心にした上海の米国人スパイ団から引き継がれたものか、という研究なのです。

1990年の増補改訂版出版の意図

ジョンソンが到達した結論は、一言で言うならば、尾崎・ゾルゲ事件というのは、基本的には中国における民族解放運動に協力したドイツ人や日本人たちの活動で、単純な「スパイ事件」ではない。むしろ政治的な弾圧事件である、という見方です。

ジョンソンは当時、スタンフォード大学フーバー研究所—当時の西側の国際共産主義研究の中心—において、戦後のアジア、アフリカ諸国の独立を見てきました。日本でのゾルゲ事件も、中国における民族解放運動や抗日国共合作との関連で見ないといけない。この視点がウィロビーには欠落している。つまり、彼らはゾルゲ事件を単純な「スパイ事件」と扱っている、と批判したのです。

しかもジョンソンは、その後、1990年に、この本の改訂増補版を出します。この改訂版では、20ページ以上の詳しい巻末補論「Reprise 1990」が加わっています。Reprise とは、普通の英語の辞書にはない音楽用語で、ソナタの一度展開した部分の繰り返し演奏・再現を意味します。ゾルゲ事件研究者の渡部富哉さんに昨日電話して、日本ではまだ紹介も翻訳もされていないことを確かめ、もったいないと思って、本日ここで紹介するために、該当する補論部分（英文）を持ってきました。

1990年に書かれたジョンソンの改訂版は、極めて重要なものです。なぜならば、1990年という年は、「ベルリンの壁」が壊され、翌91年にソ連が

崩壊し、冷戦が終焉する時点で書かれたものだからです。

彼自身は、改訂版を出した理由として、「2つの大きな変化があった」と述べています。そのひとつは伊藤律の中国からの生還で、後で述べます。もうひとつが、ジョンソンの最初の本が出た2ヵ月後に、ソ連でなぜかゾルゲの名誉回復（1964年11月5日）が行われ、「ソ連邦英雄」になってしまったことです。自分が初版本を書いた時は、ソ連は「ゾルゲとは関係ない」と一生懸命否定していたのに、これは一体どういうわけか、という疑問です。

ゾルゲの名誉回復と当時の国際関係

ジョンソンは、「ゾルゲの叙勲は自分の本に対するソ連の対応に違いない」と思ったそうです。もちろん、その背後には、当時の冷戦型政治状況があったことを見逃すことができません。そのひとつは「中ソ論争」で、ソ連と毛沢東の路線対立が表に出たことです。もうひとつは1961年の「キューバ事件」のミサイル危機に象徴される「米ソ対立」の激化の中で、ソ連の諜報活動、つまり国家保安委員会（KGB）の重要性が増してきたという事実です。そこに、ゾルゲの名誉回復の「政治的な意図」が見えてきます。つまり、ソ連国内や東欧圏に対して、諜報活動の重要性を立証する必要があった。そのモデルとして使われたのが「ゾルゲ」であったというのが、チャルマーズ・ジョンソンの診断です。

さらに、初版本以後に分かった新しい事実を踏まえて、増補を迫られた事情がありました。それは、自分の本の中で、ゾルゲ事件の摘発の端緒が伊藤律（注 元日本共産党政治局員）の自白だと書いてしまったことです。だが、その後、中国で監禁されていた伊藤律が生き長らえて、1980年に日本に帰還するという奇蹟が起った。「ゾルゲ事件の発端」は新しく書き換えられなければならないとなったというのが、ジョンソンの増補版執筆の動機です。

ゾルゲ事件研究者の渡部富哉さんが、チャルマーズ・ジョンソンの改訂版のこの箇所をいち早く読んでいたら、「伊藤律端緒説」が誤りだとさらに自信を持って書けたでしょう。伊藤律の北林トモ供述、宮城与徳監視よりも早くから、特高の宮下弘は尾崎秀実をマークしていた、と書いてあるのですから。渡部さんは残念ながら読んでいなかったのですが、チャルマーズ・ジョンソンの話を私から聞いて、びっくりしていました。

この本の改訂版は、新しい2つの動き、つまり、自分の本が発行されたあとにソ連でゾルゲの名誉回復があったこと、もうひとつ、伊藤律が中国から生還したことがあり、そこを増補し書いていることで

す。きょうはこの問題だけに時間を割けないのですが、渡部さんがあとでテープを起こして自分の著作に使いたいということです。もう少し、この問題について話を続けようと思います。

世界のゾルゲ事件研究を比較検討する

ジョンソンは、増補版で自分の研究を深めるに当たって、初版以後の世界中のゾルゲ事件研究をチェックした結論として、「見るべきものはあまりない。いちばん良くないのはプランゲの本で、幾多の過誤で満ちている。それにもかかわらず、ソ連で書かれた本の多くは、プランゲの本をそのまま引用している」と批判しています。そうした中で、役に立ったのは、ディーキンとストーリィ（注 英国のゾルゲ事件研究家）の書いた本だとほめたうえで、「しかし、必ずしも詳しくはない」と注文をつけています。

そのさい、みすず書房の裁判記録『現代史資料 ゾルゲ事件』刊行後に「日本で書かれたいくつもの著作が重要だ」と強調し、とりわけ私の恩師でもある藤原彰教授（注 歴史学者）が、ゾルゲの名誉回復前の『歴史学研究』1963年4月号に発表した論文が重要だと言っています。なぜ重要かというと、『現代史資料 ゾルゲ事件』の中から「リュシコフ亡命事件」を見つけ出して注目し、ゾルゲや尾崎はソ連のスパイではあったが、それは軍国日本に反対する反戦平和のコミュニストだったからだ、と指摘しました。ジョンソンは、藤原論文は非常に有意義で、自分の本やみすずの資料集と共にソ連での名誉回復を促したと評価しています。

また、ブケリチ（注 ゾルゲ諜報団の有力メンバー）の評価を改めたと言います。チャルマーズ・ジョンソンは山崎淑子さん、つまりブケリチの奥さんから直接英語の手紙をもらいました。その手紙とジョゼフ・ニューマンやロベール・ギランの回想から、「ブケリチの役割は、自分が書いたときよりはるかに重要だということが分かった」と言っています。ゾルゲの日本人妻だった石井花子のインタビューと荒木光子証言に頼ったプランゲの本は、ゾルゲ事件の一面を突いたにすぎないというわけです。

重視された宮西義雄の満鉄調査部記録

ジョンソンの増補版で、初版以後に出た重要なものとされているのは、中西功の回想、室賀定信の『昭和塾』（日本経済新聞社、1978年）、宮西義雄の『満鉄調査部と尾崎秀実』（亜紀書房、1983年）です。特に宮西の本が現れたことによって、伊藤律の役割や中西功の役割が、満鉄調査部と尾崎の関係、及びゾルゲの情報収集との関係で新しく理解できたというわけです。さっき竹田大典さんのお話（注 ゾルゲ

・尾崎の墓参の際、尾崎秀実の墓前で、尾崎の思い出を語った）があったのですが、尾崎が満鉄調査部から派遣されて中国大陸を回ったときの報告書のこと、宮西の本に出てきます。これは要するに、日本の石油備蓄がどのくらいあるかについての研究でした。この石油の問題が、南進政策、太平洋戦争勃発の大きな要因となるのですが、尾崎が満鉄の秘密会で行なった報告は、今日振り返ると戦前日本の国力調査の中で決定的な意味を持つものであったのです。しかし、この報告は当時の軍部に受け入れられなかったため、日本は誤った戦争の道に突き進んで行った。従って尾崎の調査報告を日本の国家がちゃんと受け止めていれば、あんな馬鹿げた戦争（注 太平洋戦争）をしなかったはずだというのが、チャルマーズ・ジョンソンの主張です。

この観点に立って、彼は「尾崎の活動もゾルゲの活動も、単なるスパイ活動ではない」と考えたのです。その理由としてあげるのは、普通の単純なスパイであれば、自分の諜報活動の成果を発注先であるソ連にだけ通報すればいいはずですが、ゾルゲについて言えば、在日ドイツ大使館で入手した国家機密をブケリチを通じてアメリカ人記者のジョセフ・ニューマンや、フランス人記者のロベール・ギランらにリークさせ、米国やフランスの新聞に報道させて戦争を阻止しようとした。これはどう見ても、スパイの行動とは言えません。

尾崎にしたってそうです。1939年から40年にかけて、毎年100本以上の論文（笑いながら「僕よりも多い量です」と言って）を書いて、しかも、当時としては大変危険なことです。中国と仲良くする「東亜共同体」の必要を説いたのです。「そんなことを普通のスパイがするだろうか」というのが、チャルマーズ・ジョンソンの指摘です。

スパイの枠を超えたゾルゲと尾崎の活動

要するに、ニューマンやギランの回想を見れば、尾崎もゾルゲも明らかにスパイの枠を超えた活動をやっていたわけで、彼らの行動は、戦後のベトナムに連なる反帝国主義・民族解放運動の中に位置づけるべきだということです。ついでに言えば、中国から日本に帰国した伊藤律が語ったことを全部分析したうえで、「伊藤も同じ流れの中にいたのであって、ウィロビー報告によって不幸なスパイにでっちあげられた」とジョンソンは言います。伊藤律の情報が「ゾルゲ事件摘発の一つの糸口になったかも知れないが、少なくとも彼が特高スパイであったことは絶対はない」というのが、チャルマーズ・ジョンソンの解釈です。ジョンソンは、こういう天皇制国家・軍部による反戦平和主義者への一連の弾圧として、

企画院事件、ゾルゲ事件、満鉄調査部事件、横浜事件を一続きのものともみなしています。

ここからはジョンソンを離れますが、そういう眼で見て行くと、ゾルゲ事件の様相は変わってきます。

ソ連における名誉回復のタイミングに関しては、フェシュン（注 ロシアのゾルゲ事件研究者）資料が出てきて、初めて名誉回復のプロセスが解明できました。それは、今まで語られてきたフルシチョフがフランス映画を見て思いついた気まぐれみたいな話とは違って、非常に政治的で複雑なものでした。ゾルゲの活動が再評価され、フルシチョフ政権の最後からブレジネフ政権の最初の時点で名誉回復させることが、ソ連の国益にとってどういう意味があるかが検討されたことが、明らかになったわけです。

それから日本の資料については、先ほど申し上げたように、みすず書房の裁判記録に余りにもとられることによって、日本の研究の視野が極めて狭くなってしまった、と考えられます。

ここからは私の意見になりますが、ゾルゲがなぜ上海に派遣されることになったかということは、改めて重要になります。日本で出たいろんな本を読みますと、ゾルゲの上海行きとそこでの活動は、まるで日本での本格的諜報活動のためのトレーニングの場、尾崎ら日本人との人脈づくりのように扱われていますが、そうではないだろうと私は考えます。

ゾンテル(ゾルゲ)著『新ドイツ帝国主義』

まず重要なのは、ゾルゲが「ゾンテル」のペンネームで書いた R.Sonter ; Der neue deutsche Imperialismus, Probleme der Weltpolitik und der Arbeiterbewegung, Hamburg-Berlin, 1928 という本のことです。1929年に叢文閣から不破倫三訳『新帝国主義論』として出版されています。不破倫三（注 ブハーリンのもじり）という訳者は、朝日新聞の戦後の取締役で、当時『無産者政治教程』等を訳していた益田豊彦のペンネームということで間違いないと思いますが、最近また、当時九州帝大助教授の風早八十二だったという説も出ています（荒又重雄「戦争直後派にとっての労働問題研究」『大原社会問題研究所雑誌』第488号、1999年7月、なお益田豊彦の生涯については、石瀧豊美「曲折の行路 昭和史と益田豊彦」『西日本新聞』2008年1月4日・2月6日連載参照）。

この不破倫三は、後の日本共産党議長不破哲三がペンネームとして名前をつけるときに借用したことは、ご存知の方も多と思います。『帝国主義』と言えば、何と言ってもレーニンのものが有名ですが、1920年代に書かれたものとしては、コミンテルン（共産主義インタナショナル）・ソ連系では、ブハ

ーリンのもの、ヴァルガのもの、そして第3の流れとしてゾルゲ＝ゾンテルのものがあります。ここでは詳しく申し上げませんが、ゾルゲは、ポーランド出身のマルクス主義者ローザ・ルクセンブルクの『資本蓄積論』の流れで経済学を学んだので、資本主義・帝国主義というのは非資本主義領域があることによって存在するというローザの論理、世界構造と植民地問題を重視する論理を基底にしています。

マルクス経済学者として挫折したゾルゲ

その観点から彼は、1928年『新ドイツ帝国主義』の中で、ひとつはドイツ国内に米国資本が流入して、資本主義的な合理化が始まったと言っております。これはブハーリンやヴァルガとほぼ同じですが、アメリカ資本主義を重視するもので、トロツキーやグラムシが「アメリカニズム」「フォード主義」と呼んだものです。もうひとつは、ドイツ帝国主義は一度は第一次大戦で打ちのめされたため、欧米先進各国と対等に競争して植民地へ進出できないけれども、しかしアジアには進出できるということで、中国を次の大きなドイツの資本輸出の場として位置づけ、その拠点が上海であると言っています。

事実、上海はドイツ帝国主義の新しい拠点となりつつあったのです。ただし、1929年に米国に発する世界恐慌が起きますが、ゾルゲはそこは予測していません。またナチスの台頭も予想していません。その点、ヴァルガの方は、恐慌が起こる起こると、危機をあおって実際に起こったものだから、彼は予言者のように扱われて、30年代に高い評価を受けます。一方、ブハーリンの方は、1928-29年にスターリンによる批判によって失脚してしまいます。経済学者としてのゾルゲは、ドイツ帝国主義の復活を唱えた『新ドイツ帝国主義』はどうもローザ・ルクセンブルクやタールハイマーの流れだということで、ドイツ共産党内のローザ・ルクセンブルグ主義、流通主義として批判を受け、ゾルゲは経済学者としては挫折してしまう。ちなみに益田豊彦は、『新帝国主義論』の前に、高山洋吉と一緒にローザ『資本蓄積論』（1927年）を翻訳しています。

コミンテルン幹部に拾われたゾルゲ

しかし、ゾルゲをアナリストとして高く評価したのは、マヌイリスキー、ピャトニツキー、クーシネンという当時のコミンテルンの幹部たちでした。ゾルゲの政治経済の分析能力を高く買って使い出したのが、中国への派遣につながったのです。そう考えるのが妥当だと思います。ゾルゲもまた、新ドイツ帝国主義論者として中国に注目した。ゆえに1927年蒋介石クーデター後の中国に派遣されたと考える

と、そのあとの彼の活動がスムーズに理解できます。

では、ゾルゲは中国では何をやったのか？ 実は上海におけるゾルゲの活動については、現段階ではほとんど明らかになっておりません。中国側の資料が全く出ていません。ソ連で出た資料、日本で出た資料、米国で出た資料はどれもあまり役に立ちません。ゾルゲ自身も特高の取り調べに対して、中国での活動についてはほとんど供述していません。

しかし、当時の中国がどうなっていたかを詳しく追いかけて行くと、ゾルゲの役割が自ずと浮び上がってきます。この点で重要な資料が、ユリウス・マーダーの著書です。『ゾルゲ事件の真相』という表題で日本語訳書がありますが、原本は東ドイツのゾルゲ事件研究家マーダーが、1964年のゾルゲの名誉回復後に同国で出版したドイツ語の本です。この本がなぜ重要かと言いますと、当時の中国でゾルゲと一緒に活動していたのは、ロシア人ではなくて、主としてドイツ人でした。そのゾルゲと一緒に上海で活動したドイツ人たちの証言が、マーダーの本には出てきます。そのうち重要な人物の1人は、オットー・ブラウンというコミンテルンから派遣された中国紅軍の軍事顧問です。彼との連絡が出てくるのは、ゾルゲが上海で軍事情報を集めていたことを意味します。もう1人は、コミンテルン極東部で政治指導を担当していたゲアハルト・アイスラーで、のちに米国共産党顧問になった人物です。こういう人たちのことを、ゾルゲは日本の警察にはほとんど供述していません。

中国共産党の主導権を奪った周恩来

普通の本に書かれているのは、ゾルゲの下に尾崎秀実たち日本人がいて、武田さんのような東亜同文書院の学生たちが、満州事変・上海事変に際してみんな反戦・平和運動をやったという話ですね。

当時の中国というのは、コミンテルンやソ連にとって決定的に重要ないくつかの問題がありました。そのひとつは、1927年の蒋介石の反共クーデターによって第一次国共合作が崩壊し、中国共産党の革命路線が大きな問題になったことです。

ゾルゲが中国にいたときに、李立三（注 中国共産党指導者。1930年当時、党中央で極左冒険主義を推し進めた）路線が批判されて、コミンテルンから派遣されたミフ（注 パーベル。ウクライナ出身のユダヤ人、中国問題に関するコミンテルンの専門家。のちにモスクワの孫逸仙大学学長。スターリン粛清中、不明に）を後ろ盾に、国際派の周恩来（注 のちの中国首相）と王明（注 本名は陳紹禹。1930年代初めの中国共産党総書記）らソ連留学組が主導権を奪いました。毛沢東（注 のちの中国共産党主

席兼国家主席）はまだ表に現われていないときです。

その当時の中国共産党の中心は、上海と広東でした。ただし、中国革命のあとで書かれた中国共産党の公式党史は、すべて毛沢東中心に書かれています。毛沢東はそのころ井冈山から江西省、福建省の革命根拠地の方におりまして、指導者の一人に過ぎませんでした。中国共産党中央では、重要な役割を果たしていません。そのため共産党本部があった上海のことは、ほとんど研究されていません。きょうはこの問題に時間をあまり割けませんが、毛沢東、鄧小平のあとに江沢民（注 のちの中国国家主席）という上海出身の指導者が本格的に現れてから、上海では、上海地区共産党の伝統の掘り起こしが急速に進められました。その中で、中国共産党の真実、つまり1920年代から30年代初めの中国共産党の中心は上海であったことが、想起されるようになってきました。

ドイツで学んだ中国人共産主義者たち

その際、中国共産党の路線転換に重要な役割を果たしたのが、コミンテルンとドイツ人顧問団でありました。その中心人物がゲアハルト・アイスラーです。さらに、「28人のポリシェビキ」というのがいます。ソ連の孫逸仙大学で学んで帰ってきた、王明らソ連帰りの中国人共産党員たちです。また、ドイツのベルリン大学などで学んだドイツ・オーストリア留学組の中国人共産主義者たちがいます。彼らはゾルゲやアイスラーたちの活動を、その周辺で支える重要な役割を果たしました。このことは最近、新しく発掘された歴史資料で明らかになっています。

次に述べるハイデルベルク大学カンペン教授の研究報告も、その1つです。カンペン教授は、ハイデルベルク大学の中国共産党史の若い研究者で、彼の書いた論文「オーストリアとドイツで学んだ中国人共産主義者と帰国後の活動」が、日露歴史研究センター発行の『ゾルゲ事件関係外国文献翻訳集』No. 18に掲載されることになっています。（注 3月20日発行の『翻訳集』No. 18に掲載されている）

1930年ごろ、ゾルゲらの活動を支えるため、ドイツ共産党の中からドイツ語の堪能な4人の中国人共産主義者が上海に派遣されました。陳翰生、呉照高、劉思慕、杜任之です。このうち、陳翰生はドイツで博士号をとって、北京大学教授となり、戦後は中国社会科学院総裁を務めた有名な人で、107歳まで生きました。この人は、ゾルゲを支えるドイツ語の分かる中国人グループの中心人物でした。呉照高はドイツ人妻イレヌ・ヴァイデマイヤーと一緒に帰国し、イレヌの経営するツァイトガイスト（時代精神）書店は、当時上海の左翼洋書文献輸入の中

心で、尾崎秀実もよく通いました。劉思慕と杜任之は、フランクフルトでマックス・ホルクハイマー、カール・マンハイムに学んだといえますから、コミンテルンに登用される前は福本和夫（注 昭和初期の共産主義運動の理論的指導者。組合主義などから理論闘争によって分離することによって、前衛党が建設できるとする党組織論「福本イズム」を説いた）と同じ頃にフランクフルト大学社会研究所に勤めていたゾルゲの後輩にあたります。そのほか 40 人くらいのドイツ語圏留学組の中国人共産主義者がいますが、こういう人たちの活動について、カンペン論文は詳しく書いています。

そして、その中国共産党側での受け入れ・連絡役が、もともとパリ、ベルリンで中国共産党を組織してきた周恩来と、その配下で「中共特科」という特別情報部門を担当していた潘漢年らでした。

中国紅軍向け武器調達に活躍したゾルゲ

端的に言うと、ゾルゲの主たる任務は、軍事情報の収集でした。中国の蒋介石軍へ、当時ドイツの国防軍から大量の武器が供給されていました。それに対して、中華ソビエト、つまり中国紅軍の方は武器が不足していたのです。それを何とかしなければいけないという仕事に、ゾルゲは携わっていました。

具体的にどんなことをやっていたのか？ マーダーの本の中に、当時中国にいた幾人かのドイツ人の証言が出てきます。例えばルート・ヴェルナー。有名な東独の経済学者クチンスキーの妹です。そのヴェルナーの回想によると、ある日、ゾルゲの部屋に行ったら、鉄砲がたくさん置いてあった。中国のソビエト地区には当時 65,000 人の中国人軍団がいたが、銃が足りなくて 30,000 丁ほどしかなく、不足分を何とかして穴埋めする必要があります。ゾルゲの部屋にあった銃は、その一部と思われ、「私はそれを見てびっくりした」という記述が出てきます。ゾルゲ機関による武器調達を目の当たりにしたわけです。

もうひとつ、重要なことをマーダーの本から引きますと、ゲアハルト・アイスラーの名は、みずず書房発行の『現代史資料 ゾルゲ事件』を読んだことのある人はご存知かと思いますが、アイスラーは当時のコミンテルン上海極東部の政治代表でありました。一方、ヌーランは、組織代表でした。ゾルゲは日本の官憲の取り調べに対して、アイスラーとはドイツ時代から旧知だが、「任務が違うので、1～2回しか会っていない」と供述しております。ところが、マーダーの本によれば、アイスラーは、ゾルゲと緊密に連絡をとって活動していたのです。アイスラーの戦後の回想では「自分はゾルゲと 10 回以上

話した」と言っている。つまり、コミンテルンの政治的な仕事にも、ゾルゲは携わっていたわけです。

ついでに言えば、ゾルゲが上海でドイツ国防軍と中国国民党軍の情報を得るため最初に近づいたのは、クルンベルク総領事から紹介された南京政府ドイツ軍事顧問団のジルベルト大佐でした。この有能な軍人から信頼されて、ゾルゲは新型兵器の実験にも立ち会い、やがてジルベルトは上海総領事に昇任しました。後の日本滞在時のオット駐日大使との関係と、よく似ていますね。

こうした部分は、在上海の日本人や日本共産党とは関係のない世界です。また中国共産党の毛沢東派もほとんど関係がありません。モスクワから派遣されたコミンテルン東洋部長ミフが最高責任者でしょうが、ゾルゲやアイスラーを支えるコミンテルンと赤軍とモスクワ孫逸仙大学帰り、あるいはベルリン留学を経験した中国人グループ、これが恐らくゾルゲの軍事・諜報活動の後方支援組織となり、その底辺のところに、満州事変が始まったため、これに反対する中国人・日本人の大衆組織があつて、その接点のところに、王学文や尾崎秀実や東亜同文書院の学生グループがいたわけです。

周恩来の下で情報活動をした潘漢年

では、彼らの国際指導を受け入れ、李立山路線を修正した中国共産党中央には、一体、だれがいたかということ、それは周恩来でした。それからソ連やドイツからの帰国組でした。王明は、まだそれほど偉くなっていません。そのころゾルゲは、アイスラー、ヌーランやスメドレー、尾崎秀実らと活動していたのですが、周恩来はソ連に忠実で、李立三の極左路線を改めるために党内で闘っている。これが当時の中国共産党の内実です。毛沢東は、そのころまだ重要な役割を果たせない時期だったのです。

つまり、中国共産党の党史が明らかにならないから、ゾルゲの活動も明らかにならなかったという関係があるのです。そういう観点で見ると、こういうことが最近になって分かってきました。つまり、尾崎や東亜書院グループと直接関係のある王学文のような、表で実際に活動をやっている人ではなくて、楊国光（注 中国のゾルゲ事件研究者）が中国語で書いた『リヒアルト・ゾルゲ』で取り上げた潘漢年（1906 年～ 1977 年。江蘇省出身。25 年中共に入党。左翼文化運動を指導。周恩来の下で、統一戦線地下工作に従事。55 年、反革命の冤罪で逮捕・収監される。82 年、名誉回復）ら「中共特科」（注 中国共産党中央に直結する同党の諜報機関）の重要性です。

潘漢年は、文学運動出身で留学経験はありません

が、当時、中国共産党員として周恩来の下で情報活動の要となる位置にいた人物です。その後華北で日本の岩井機関（英一。東亜同文書院卒業後外務省に入り、領事補として上海公使館情報部で情報収集に従事。38年には上海総領事館特別調査班＝岩井機関を特設、潘漢年と遠殊らを保護下に置き、蒋介石の動向を探らせた。著書に『回想の上海』1983年）と取引したり、日本軍と和平交渉を行ったりする影の使者として活躍します。毛沢東は、国共合作時は潘漢年を重宝がって使っていたのですが、1950年代に、戦時中に日本軍と交渉した日本のスパイだということになって、上海副市長までやったのに肅清されて、寂しく死んでいきました。

ところがこの人物は、江沢民時代になぜか名誉回復して、中国語でいくつも伝記が出版されています。どういう理由によるものでしょうか？ 改革・開放政策のもとで「IT（情報技術）革命の父・潘漢年」と言われ、情報活動の重要性を中国で先駆的に唱えたことが、今日では高く評価されています。ソ連におけるゾルゲの名誉回復と似た事情ですね。毛沢東からは嫌われましたが、ゾルゲ・グループと中国共産党を仲介する窓口でした。

そういう目で見ますと、中国におけるゾルゲの活動というのは、いわば頂点でモスクワとつながりやっている軍事的・政治的組織活動と、底辺で大衆運動としてやっている抗日反戦平和運動が、二重になっているわけです。上の方のゾルゲ・中国共産党リング（諜報網）と下の方のゾルゲ・スメドレー・尾崎リング（諜報網）と2つあって、われわれがこれまで見てきたのは下の方ばかりだったことが分かってきたのです。（その後楊国光さんと北京でお会いしたところ、中国では、ゾルゲが上海で周恩来、潘漢年と会っていたという証言も出てきたそうです）

日本帝国主義研究はソ連の国益に繋がる

従って、ゾルゲがなぜ中国から日本にやってくるのか、そして日本で何をやったのかという問題は、あくまでも上の方のリングの続きで、中国における「第1次国共合作」がいったん潰れて「第2次国共合作」から「中国革命」へと続いて行くのですが、この大きな流れの中でゾルゲの諜報活動を位置づけることが必要だろう、と考えられるのです。

ゾルゲの「新帝国主義論」で言えば、米、英、仏、独の資本とソ連も入って、中国大陸で覇権を争うのですが、その途中から日本のような成り上がりが割り込んできたため、昔の帝国主義の論理では、パズルが解けなくなってしまった。そこで「日本帝国主義」をちゃんと研究しなければならないということが、ソ連の国益にとっても重要な課題となって、ゾ

ルゲが日本に派遣されたと考えるべきではないかというのが、私の大きな仮説です。

そのための傍証として、ゾルゲが創設した諜報組織「ラムゼイ機関」からアプローチして行きますが、（そうやって時計を見て、「あと10分くらいですね」と残り時間を確認したうえで）あとはもう「残された謎」だけに焦点を絞ってお話ししましょう。

米国は共産主義運動要員の重要な供給地

そのひとつは、米国共産党の役割です。ゾルゲは1933年9月の日本入国と、1935年にモスクワで開かれたコミンテルン第7回大会の頃、日本—モスクワを往復するのですが、なぜかこの2回とも、シベリア鉄道ではなく、ニューヨーク経由のルートを取りました。しかも、重要な指令は、ニューヨークまたはシカゴで受け取っています。このこと自体、今後改めて研究せねばなりません。宮城与徳（注：ゾルゲ諜報団の有力メンバー）についてはこれまでも研究されてきましたが、ゾルゲ自身がなぜニューヨーク経由であったかという問題をもっと真剣に研究する必要がある、というのが私の意見です。

はっきり言えば、ソ連共産党、赤軍、コミンテルンの進める国際共産主義運動・世界工作の重要な中継地として、当時の米国があったということです。これは、ゾルゲ・尾崎処刑60周年を記念して、日露歴史研究センターが主催した2003年の講演会でも述べたことですが、米国という国には、世界中のあらゆる国のあらゆる人種・民族の出身の共産主義者がいたのです。米国共産党そのものは、米国政治にほとんど影響力を持たない泡沫政党でした。しかし、党員は20,000人くらいいて、モスクワから「日本人が欲しい、ポルトガル語のできる要員が欲しい」と要求すれば、共産主義者であるそういう人物を、いつでもいくらかでも提供できる運動体であり、組織体であったのです。従って、実は米国には、ソ連が様々な世界工作を行うための重要な基地が置かれていたと考えるべきで、この関係の資料は、いま続々と世界的に発掘されている段階です。

きょうお配りした資料の参考文献の一番最後のところにあげておきましたが、例えばH・クレア、J・E・ヘインズ、F・I・フィルソフ共編著『アメリカ共産党とコミンテルン』（五月書房、2000年）という本は邦訳もあり、皆さんご存知だと思いますが、このほかに、『VENONA 文書』と言って、米連邦捜査局（FBI）が旧ソ連の諜報活動を調査した文書が公表されています。あるいは『ミトローキン文書』と言って、戦後、ロンドンに亡命したソ連国家保安委員会（KGB）要員の文書などが利用できるようになりました。右派の国際政治学者である中西輝政

京都大学教授らが、戦後自民党幹部にも石田博英(注 秋田県出身の自民党代議士。石橋内閣の官房長官などを務めた。のちに日ソ友好議員連盟初代会長)というソ連の協力者がいた。「だから共産主義は危険だ」と言って『諸君』や『正論』で使っているのは、これらの文書です。これらの文書は学術的にも重要で、その作成意図や発表の意図を吟味したうえで読めば、なかなか使い甲斐のある資料です。例えば、アメリカ人女性ジャーナリスト、アグネス・スメドレーに共産党籍があったことは、これらの文書で完璧に分かってしまうわけです。彼女に関する実際の連絡文書が載っています。そういう形で、米国共産党の関係が非常に重要なのです。

先ほどちょっと言及したゲアハルト・アイスラーは、1930年から1932年までゾルゲと一緒に上海で活動しておりました。彼は33年にいったんモスクワに戻ったあと、米国共産党のコミンテルンの指導員として米国に派遣されて、米国共産党書記長アーサー・ブラウダー以下の同党幹部の指導に当たったのです。その下に、野坂参三(注 元日本共産党議長)とジョー・コイデ(注 野坂が米国で活動していたときの秘書役)の活動がありました。

アイノ・クーシネンの日本での役割

もうひとつ、ソ連やコミンテルンにとって、ゾルゲだけが日本へ派遣された秘密諜報員ではなかったことを、指摘しておきたいと思います。日本での諜報活動は、ゾルゲとアイノ・クーシネンとで「分業」が行われたということです。

お配りしたスウェーデン語資料の『微笑の国の日本』を見てください。アイノ・クーシネンは、ご存知の方もおられるかと思いますが、ゾルゲが滞日した同じ時期に日本にいて、諜報活動をやっていた女性です。旦那さんはオットー・クーシネンと言って、コミンテルン幹部会員で日本共産党の32年テーゼ

作成の中心人物です。ゾルゲの上司でもありました。しかしクーシネン夫妻の婚姻関係はうまくい

瑞典の女作家再び来朝
二年前日本に
来たスウェー
デンの女流作家
リスベート・
ハンソン女史

(三)が今春、首都ストックホルムで発行した『微笑の国日本』(デットレーエンデ・ニッポン)をお土産に七日の秩父丸でヒヨッコリ来朝帝国ホテルに入った【写真はハンソン女史】(一九三六年十月八日付)

かず、アイノは、ゾルゲと同じ赤軍第4部から日本に派遣されて諜報活動をやっていました。

ゾルゲは主として日本の政治、軍事、経済に関す

る諜報活動をやっていて、幸運にも尾崎秀実を協力者に抱き込み近衛内閣の中枢にまで近づくことができました。これに対して、アイノ・クーシネンの任務は、皇室など日本の最上層部に食い込んで、機密情報を入手することにあつたのです。

今回、スウェーデンに行つて初めて分かつたのですが、『デットレーエンデニッポン』というタイトルのスウェーデン語で書かれた本ですね。(そうやって資料を見せる)これは何のために使われたかという、彼女は本当はフィンランド人なのですが、スウェーデンの貴族出身であることを売り物にして、皇室など日本の最上層部に食い込んだのです。

そのために、赤軍諜報機関は、わざわざストックホルムにこの本を出版するための出版社を作りました。つまり赤軍諜報機関が金を出して、スウェーデンでスウェーデン語でこの本をまず出版したのです。ついでに英語版も作られたようですが、それは私もまだ見ていません。

これを読んだ朝日新聞の記者(たぶん中野五郎)がすっかり喜んで、スウェーデンの作家になりましたアイノ・クーシネンの記事を書きました。こうしてアイノ・クーシネンは、当時の日本のマスコミを通じていわば信任状を得て、秩父宮ら日本の上流階級にうまく自分を売り込んだわけです。1936年10月22日付朝日新聞(東京)に彼女の記事が載つ



第二の印象記 スウェーデンの美しい女流作家が再び来朝した。この女性の碧く澄んだ眼に「東京」はいかに微笑んだか。(一九三六年十月二十二日付東京朝日新聞記事)

ているので、そのコピーを本日皆さんに資料としてお配りしておきました。

スウェーデン語で書かれたこの本そのものは、実はまったくつまらないものです。目次がそこにあります、「都踊り」「道成寺」——あとは日本のお茶・生け花とかサクラとか、そういうものです。要するに、彼女はいかに日本に理解のある親日派の北欧

貴族であるかを、赤軍諜報機関が資金を出して PR にこれつとめたという代物であります。もちろん、日本人はそんな裏があろうとは知りません。朝日新聞の中野（五郎）記者と『ジャパントイズ』の上原記者が主な情報源だったようです。

彼女がスウェーデンで泊まったのは、「グランド・ホテル」と言って、ストックホルムで一番大きな、ノーベル賞受賞者が泊まる豪華ホテルです。本当に泊まったのか確認したいと思って、ストックホルムでホテルの宿帳を調べたら、湯川秀樹とか大江健三郎とかノーベル賞を受賞した日本人のサインは載っていましたが、戦前の部分はなく、彼女の名前は見つかりませんでした。そういう最高級のホテルに3ヵ月も泊って、スウェーデン語と英訳本を出版したうえで、その本を持って日本へやってくる、日本人を信じ込ませ、上流階級に近づくという手の込んだ活動をやっていたのが、これらの記録です。（そうやって、アイノ・クーシネンの書いた本や朝日新聞に掲載された紹介記事のコピーを見せる）

ちなみにこの本は、日本でも国会図書館と国際交流基金の図書館に納本されて、現在でも保管されています。しかし、閲覧禁止で研究者も見ることができない本です。私はスウェーデン国立図書館で、この本のコピーを取ってきました。

召還命令を拒否し日本に留まったゾルゲ

アイノ・クーシネンはそういう細工をして秩父宮と会い、皇室の園遊会にも参加したことを回想録（注 日本語訳書『革命の墮天使たち—回想のスターリン時代』平凡社、1992年）に書いています。それ以上の活動のことは、資料も証言もなく、何も分かっていません。

彼女は、1937年末にモスクワに呼び戻されるのですが、それに先立って、ゾルゲと会い「一緒にモスクワへ帰らないか」と持ちかけます。だが、ゾルゲはなぜか、彼女の誘いを断って東京に残り、諜報活動を続けました。おそらく直属上司ベルジンを含むモスクワでの赤軍・コミンテルン要員のスターリン粛清について、知っていたのでしょう。

アイノ・クーシネンは、翌38年1月にモスクワに帰ったとたんに、内務人民委員委員部（NKVD）によって逮捕されてしまいます。ちょうど杉本良吉（注 演出家）と岡田嘉子（注 女優）が雪の樺太（注 現サハリン）国境を越えて、ソ連の国境警備隊に捕まったのと、1週間も違いません。アイノ・クーシネンは、コミンテルン幹部会員オットー・クーシネンの妻であったにもかかわらず、その後25年間も収容所（ラーゲリ）にぶち込まれて、ラーゲリ生活を送ることになったのです。戦後にオットー

・クーシネンがソ連共産党中央委員会幹部会員として死んだときに、正式の奥さんがいないのはまずいということになって初めて釈放され、ほとんど結婚生活の実質はなかったのですけれども、喪主の役割を果たしました。それから出国を認められて、晩年はフィンランドで過ごしました。

ドイツで出版されたアイノ・クーシネンの回想録『革命の墮天使たち』の中で、ゾルゲ事件に関連して重要だと思ったことを、2、3お話しします。

アイノ・クーシネンは、確かに日本の皇族と関わっていたことは事実なのですが、彼女を日本に派遣するときのソ連諜報機関の直属の責任者は、シロトキン（注 赤軍参謀本部諜報総局日本課長）でした。彼の手配によって、アイノ・クーシネンがストックホルムでスウェーデン語の本を出すなど御膳立てが行われ、日本に派遣されてきました。シロトキンという人物は、私がモンゴルで一昨年行なわれたゾルゲ国際シンポ報告でも取り上げましたが、モスクワでゾルゲの情報を受け取り、正しいと思って上層部へ上げていた人物です。しかし、赤軍諜報機関の中には「ゾルゲは2重スパイだ」という幹部たちがいて、ゾルゲ情報は信用されませんでした。ゾルゲを信頼して、1964年のゾルゲの名誉回復の際にも一番重要な証言をしたのが、このシロトキンでした（フェッシュン文書から私はそう判断しましたが、本誌12号掲載のKG B極秘文書では「ゾルゲに対するシロトキンの偏った評価」が問題にされています）。

このように、ゾルゲとアイノ・クーシネンは、同じルートで日本へ派遣されていましたが、任務は異なるという関係になります。

NKVDの尋問にアイノは何を自白したか

もうひとつは、アイノ・クーシネンがソ連に帰国して捕まったときの尋問官に、ザイツェフという人物がいます。彼女の回想録の中に、一言だけ出てきます。ゾルゲの手記にはまったく出てきません。フェッシュン文書が公になって、ゾルゲの名誉回復時の証言者として出てきた名前です。それが、アイノ・クーシネンの本の中に登場していました。

このことは何を示すかということ、アイノ・クーシネンがモスクワで尋問されたとき、おそらくゾルゲの日本での活動についても聞かれ、どのように述べたかの問題になります。彼女は拷問を受けました。苦し紛れにいろいろなことを喋ったと思いますが、その後のゾルゲ諜報団の情報がモスクワでどう扱われたかに、影響を与えたと思われます。

この辺は、是非ロシアの方々に調べていただきたい。アイノ・クーシネンのゾルゲについての尋問記録がモスクワにあるはずですが（そうやって、当日、

この講演会を傍聴していた2人のロシア人研究者、すなわちウラジミール・アルバトフ東洋学研究所副所長とエレナ・カタソノワ同所日本問題上級研究員に調査を頼んだ。アイノ・クーシネンは、おそらく「ゾルゲは怪しい、ソ連を裏切った」と述べたであろうと、私は推測しております。そのこともあって、モスクワでは、ゾルゲ情報を素直にそのまま受け取ることに疑念が生じて、結局、ゾルゲは良い情報を送っていたにもかかわらず、モスクワでは信頼されなかったという悲劇的な事態を招くことになったのではないかと、思うわけです。

そのほかにも、いろいろ「残された謎」の話がありますが、(時計を見ながら) 予定した時間がきてしまったので、これからピンポイント風に(照準を一点に定めて) 問題を述べていくことにします。

そのひとつに、尾崎秀実がゾルゲと一緒に 1930年～32 まで上海で諜報活動をやったあと大阪朝日新聞に帰社して、いったんゾルゲ諜報団とは関係が中断し、34 年に奈良公園でゾルゲと再会して協力を約束したことになっています。しかも尾崎が、ゾルゲがそれまで名乗っていた「ジョンソン」ではなくて、本名がゾルゲだと知ったのは、36 年だといえます。このことは、みすず書房の『現代史資料』の中に出てきます。でも、私は、どうもそう単純に断定できないのではないかと、疑問を持っています。

ゾルゲと尾崎の仲介者、鬼頭銀一の謎

最近の私の研究によれば、資料にも入れておきましたが、1933 年に尾崎は、神戸の鬼頭商会の鬼頭銀一という人物と連絡を取って、自分が上海で知り合った永田美秋という人物を鬼頭に紹介し、就職の世話をしてもらいました。鬼頭銀一は、実は 1930 年にゾルゲと尾崎を初めて会わせた人物だと、尾崎は一貫して供述していました。ところが、ゾルゲが「いや鬼頭と自分たちは関係ない。あんな有名な米国共産党員には上海では近づかなかった」と証言したために、鬼頭が尾崎とゾルゲを引き合わせたことは判決では否定され、スメドレーの仲介ということにされました。以後、ゾルゲ事件研究では、完全に無視されてきた人物です。

ところが、私の鬼頭家ご遺族からの聞き取り調査では、鬼頭銀一は、31 年 9 月に上海で捕まって、日本で市ヶ谷刑務所に入り、執行猶予つきで出てくるのですが、尾崎秀実とは 1933 年から 36 年にかけて、何度も会っています。つまり、ゾルゲがいないところで、上海のリング(諜報網)が復活しています。あとで見ただけならば分かりますが、『尾崎秀実著作集』(勁草書房、1977～79 年)の第4巻に入っている永田美秋宛の尾崎秀実の手紙を資料

として入れておきました。ここでいう「信頼できる人物」とは、具体的な名前が出てこないのですが、これは鬼頭銀一にほかならないのです。このことは、大阪に住んでおられる永田家、鬼頭家のご遺族に調べてもらい確認できました。つまり尾崎秀実は、上海のコミンテルン及びゾルゲ機関につながる人物と、ゾルゲと再会し日本での活動に組み込まれる前から会っていたのです。

もうひとつ重要なことは、33 年に鬼頭銀一に上海で知り合った永田美秋を紹介する同じ時期に、尾崎は、水野成(注 ゾルゲ諜報団メンバー)を大阪の大原社会問題研究所に紹介しています。水野成は、「上海で鬼頭銀一の仲介で中国共産党とつながった」と、これは水野の判決文にも出ています。つまり、ゾルゲと奈良公園で再会する前に、尾崎は大阪で、上海で繋がりがあった重要な人物のリンク(諜報団)を、すでに自分で作っていたわけです。このことをどう思うかによって、ゾルゲ事件の性格付けと評価は、違ってくるだろうと思っています。

重要な亡命者・リュシコフ大将の証言

ついでに言えば、私の近著『情報戦と現代史』に書きましたが、米国でゲアハルト・アイスラーの下で、野坂参三とジョー・コイデ(小出)たちがカリフォルニアでやっていた日本への『国際通信』『太平洋労働者』や反ファシズム文献の送付と、上海におけるスメドレーの「ボイス オブ チャイナ」(中国の声)の活動なども、ゾルゲ・グループと繋がっていたことは確かです。

最後に一言だけ、あとで何が重要なことになってくるかという関係で、中国革命の問題を、ここでもう一度申し上げておきます。

ひとつは、リュシコフが日本へ亡命したときに、ゾルゲがどういう情報をモスクワに送って、それがどう扱われたかが決定的に重要です。これはウランバートルの第4回ゾルゲ事件国際シンポジウムで、ロシア側には是非調べてほしいと頼んでおきましたが、きょう改めてお願いしたいと思います。(そう言って、ロシア側出席者のアルバトフ、カタソノワ両氏に再度、調査依頼の要請を行なった)

では、問題のリュシコフ情報を日本側で扱っていたのは、だれなのか? ここに書いてあるように(と言いながら、手元の資料を読み上げる)、軍部の諜報将校を別にすれば、重要なのは、高谷覚蔵、勝野金政の2人です。高谷覚蔵は、野坂参三が日本共産党委員長にするために 1934 年に日本へ派遣した人物です。しかし、日本に帰国するとすぐに捕まって、転向後は日本軍部に協力していました。

本日、勝野金政のお嬢さんの稲田明子さんがお見

えになっておりますが、勝野金政は、モスクワで片山潜（注 日本の社会主義運動の先駆者）の秘書をやっていた人物です。山本懸蔵の告発で、1930年に突然「日本のスパイ」容疑で逮捕されて、4年間白海の収容所（ラーゲリ）に入れられてしまいました。その後34年に奇跡的に日本に脱出し、多くのソ連の真実についての著作・論文を残しました。「日本のソルジュニツィン」（文化人類学者の山口昌男）とか「日本のメドヴェーデフ」（社会主義思想研究家の石堂清倫）などといわれるように、今日名誉回復され、再評価されています。

ソ連事情に精通した高谷覚蔵と勝野金政

つまり、日本軍は、高谷覚蔵や勝野金政というソ連の内情に精通している人物を使って、リュシコフから極東ソ連軍の配置とかスターリンによる赤軍の粛清について詳しく聞き取り、いろいろな機密情報を引きだしたのです。

そこで得られた日本軍側のリュシコフ情報と、ゾルゲが在日ドイツ大使館で入手しモスクワに送った情報を突き合わせて、果たしてどちらがどの程度に正しく、ノモンハン事件や日中戦争にどう使われたか？ そうした情報戦の比較にとって、リュシコフ情報が非常に重要だということです。

こういう流れから、ゾルゲ事件は、その後の中共諜報団事件、満鉄調査部事件、その前に起きた日本国家の中枢に関わる企画院事件、さらに言論弾圧の横浜事件へと繋がっているわけです。

そうした中で、ゾルゲ事件の政治的効果として面白いのは、日本の命運を決した日独同盟に亀裂をもたらした、思わざる効果だろうと思います。

冒頭で嬉野満洲雄の証言を紹介しましたが、この関連で言えば、ゾルゲが逮捕されたとき、駐日ドイ

ツ大使オットと、ゾルゲの監視をも一つの任務としてゲシュタポ（ドイツ国家秘密警察）から日本へ派遣されたナチスのマイジンガーが、必死になって「ゾルゲは絶対にスパイではない」と、オット大使とともに日本の特高警察に釈放を働きかけたことです。篠田正浩監督の映画『スパイ・ゾルゲ』にあるように、逮捕後面会したゾルゲ自身が、「もうおしまいだ」と言って、自分がソ連の諜報員であったことを認めるわけです。オットの受けた衝撃は、非常に大きなものでした。ゲシュタポの日本代表マイジンガーも、ゾルゲを全面的に信じていたのです。

「歴史の真実」を明らかにする必要

後の方に、日本の憲兵隊資料を入れておきました。日本の憲兵隊は、特高警察とは別個にゾルゲを疑っていましたが、ナチスでゲシュタポのマイジンガーが「ゾルゲは絶対に信頼できる人物だ」と太鼓判を押ししたので、ゾルゲの身辺調査を途中でやめてしまいました。時事通信の名越健郎記者が発掘した資料によると、マイジンガー自身も（と言って、配布資料を見ながら）日本で戦後捕まって、米軍とCIA（米中央情報局）の事情聴取を受けるのですが、その結論に、「ゾルゲ事件によって日独関係は目に見える形で明らかに妨害された」と述べています。これがマイジンガーの、戦後のゾルゲ事件評価でした。

米国は、こういう事実を全部掴んでおりました。もっとも日本駐在のマッカーサーとウィロビーは、そんなことを知りませんでした。そのために、ゾルゲ事件は「マッカーサー・ウィロビー史観」によって歪曲されてきたのです。われわれはそれを正して、真実を明らかにしていく必要があるのではないかと私はそう思っているわけです。これをもちまして、私の研究報告を終わらせていただきます。（拍手）

司会 加藤先生、どうもありがとうございました。大変な熱演で興味深い話がたくさん出てきました。とくに上海におけるゾルゲの活動は、日本ではほとんど知られていないことが…。

加藤 ほとんどの日本人が読んでいない本があります。（そう言って、手元にあった本を取り出して、見せる）トーマス・キャンペン（カンペン）著『毛沢東と周恩来 中国共産党をめぐる権力闘争【1930年～1945年】』（三和書籍、2004年）です。この本には、毛沢東と周恩来の関係が1943年までいかに良くなかったかが書かれています。周恩来の方がモスクワの信頼が厚かったのですから、現在の中国共産党党史の空白を埋めています。

司会 先生のお話の中で出てきたルート・ウェルナーが書いた『ソーニヤ・レポート』も、まだ日

本で翻訳出版されておりません。またユリウス・マダーの『ゾルゲ事件の真相』は朝日ソノラマ文庫で出ていますが、これは部分的な翻訳です。ゾルゲ事件に関しては、現段階では未翻訳の有益な文献や資料がまだまだたくさん存在しております。日露歴史研究センターとしてはそういうものの翻訳や出版に、積極的に取り組んで行かねばならないなと思っております。加藤先生の講演から大きな知的刺激を受けることができました。何か質問のある方は好い機会ですので、是非、質問してください。

由井 格 私自身、本日配布された資料に載っているウィロビーの『赤色スパイ団の全貌』という本しか持っていませんが、ウィロビー報告の完訳が出てくれば、ゾルゲ事件の内容がもっとはつきりすると思うのです。

ポール・ラッシュがウィロビー報告を執筆

ウィロビー報告の赤色スパイ団について書いている部分は、私の見る限りポール・ラッシュなんです。ポール・ラッシュは山梨県の共産党関係者のために大きな施設を造ったため、山梨県の共産党関係者のあいだでは神様みたいになっている人です。

ちょっと彼の経歴をお話すると、戦前来日した彼は、立教大学をまともなミッション・スクールとするため、米国に何回も帰って自分の関係する教会の関係者から膨大な資金を集めて立教大学の中に立派な礼拝堂を建てました。ところが、戦争が起きて日本から追放され、香港に行くのですが、香港が日本軍に占領されて、米国に帰ります。この人は戦前の日本にアメリカン・フットボールを持ち込んだことでも、有名な人であります。

戦後、占領軍であるGHQに設けられた諜報機関、参謀第2部（G2）の一員として再来日し、立教大学に行くと、ポール・ラッシュが戦前に建てた礼拝堂はぶち壊されて、豚小屋の柵が立っていたのです。それが頭にきたラッシュは、立教大学がキリスト教系の大学でありながら、戦時中軍国主義に加担した理事7名の追放をやったのです。その中には戦後、東京都知事選に立候補した松下正寿という右翼系の政治家もいました。

立教大学の民主化と立て直しをやったラッシュは、その実力を買われて、ウィロビーの下で日本人右翼の戦犯リストを作ったのです。その後、「米ソ対立」が始まって、今度は「左翼をやっつけろ」ということになって、ウィロビー報告の一部を執筆したわけです。伊藤律スパイ説が、松本清張が書いた（注 『日本の黒い霧』所収「革命を売る男・伊藤律」文藝春秋新社、1960年）こともあって、1人歩きするようになったのは、ウィロビーとポール・ラッシュにかなり責任があると思います。

『ポール・ラッシュ伝』の刊行

幸いなことは、山梨日日新聞の記者たちが『ポール・ラッシュ伝』という本をまとめております。ポール・ラッシュのことをかなり正直に書いておまして、それを読みますと、ラッシュは沢田ハウスに入り浸り、（注 東京・麴町にあった外交官沢田兼三邸。妻の美喜は三菱財閥の当主岩崎久彌の長女。社会事業家。神奈川県大磯の岩崎邸を開放、エリザベス・サンダース・ホームズを開設して、戦後の占領下で生まれた身寄りのない日米混血児を引き取って育てた。沢田ハウスは「キャノン機関」が置かれた本郷の岩崎ハウスとならぶG2の重要な情報拠点となっていた）沢田ハウスに拘置された人たちの

写真が、この本に載っております。なぜ伊藤律とゾルゲの関係に目を着けたかということについては、ポール・ラッシュ自身は原田（注 熊雄。昭和の元老西園寺公望の秘書。「昭和研究会」を主宰）邸にも出入りしていて、原田から戦争中のゾルゲ事件の模様を聞いて、それをヒントに書いたということが、『ポール・ラッシュ伝』に書かれております。ポール・ラッシュに手を着けて行くと、ゾルゲ事件の中でも伊藤律がどういうふう祭りに上げられたかということが、かなり分かると思います。

たまたま清里（注 八ヶ岳山麓）にポール・ラッシュ記念館があって、私の実家の近くだし、山登りの関係で遭難者の救援なんかでお世話になったこともあって、つい何年か前にお礼を兼ねて訪れて、ポール・ラッシュの展示物を見てきました。日記など戦前からの遺品が結構展示されているのですが、1949年からの日記の展示がありませんでした。ポール・ラッシュが住んでいたときに一度火事になっているので、「そのためではないか」と尋ねたら、「いや、事情があって展示ができない」という返事でした。ポール・ラッシュはG2でかなり不思議な活動をしていた人でしたが、そこまでしか確認できませんので、その点について報告したわけです。

とくに日本関係を浮び上がらせるためには、ポール・ラッシュについて、若い人たちを含めて手を着けていただけると、謀略事件の一部までその輪郭が明らかになってくる可能性があるのではないかと考えています。

ゾルゲ文献翻訳者を疑ってかかる必要

加藤 ポール・ラッシュだけではありません。私が参考文献であげたウィロビーとゴードン・プランゲについていえば、翻訳者にも問題があります。ウィロビー著『赤色スパイ団の全貌』の訳者は福田太郎ですが、「ロッキード事件」で表に出た右翼、児玉誉士夫の腹心です。つまり翻訳者自身が何らかの役割を果たしていることが、明らかになるのです。

それから、ゴードン・プランゲの方は、千早正隆という元海軍参謀（海軍兵学校第58期卒）が訳者です。千早正隆は元G2戦史課にいた人物です。荒木光太郎や有末精三の部下が、なぜかプランゲの本の日本語訳を担当しています。従って『ウィロビー報告』にしろ、プランゲの本にしろ、翻訳そのものを疑ってかからないと、本当のゾルゲ事件研究は始まらないことは、確かです。

司会 それではこれをもちまして、加藤先生の「ゾルゲ事件の残された謎」についての研究報告発表を終わることにいたします。加藤先生、どうも長時間ありがとうございました。（拍手）

